

集団における謝罪の心理

12H2020 風張なつみ

1. 背景と目的

私たちは時折、自分は悪くないのに謝らなければならない、理不尽な場面に直面する。このような場面で人はどのような気持ちをいただくのだろうか。これまでの謝罪研究は、加害者自身と被害者という 2 者間での謝罪場面が検証されてきた。研究数も多い、被害者の心理に関する研究では、謝罪においては言葉以外の情動表出も許しに重要であると指摘されている(大淵, 2010、早川・荻野, 2008)。一方、数少ない加害者の心理を探った研究では、謝罪者は必ずしも真正な気持ちで謝っているわけではないことが示されている(Ohbuchi, Suzuki & Takaku, 2003、斎藤・荻野, 2004)。このように自分が悪くて謝る場面でさえ、謝罪者は心の底から謝罪しているとは限らない。

本研究では、連帯責任として謝る機会を生じさせる“集団”の場面に注目し、自分は関与していないのに謝らざるを得ない人の心理を明らかにすること、さらに所属集団のまとまりの強さが謝罪時の気持ちに与える影響を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

質問紙調査を実施し、分析した。調査の実施時期は 2015 年 7 月、調査対象者は弘前大学の学生 106 名であり、集合法により調査を行った。この質問紙では、謝罪場面のシナリオを提示し、その後、シナリオ上の人物になったと回答者に想定させ、気持ちを尋ねるといった構成になっている。シナリオの内容は、回答者があるサークルの副リーダーで、部員が犯したトラブルを代表して釈明しなければならないというものである(資料 1、資料 2)。シナリオにおいて、回答者は実際にはトラブルに関与していないのに、集団のために釈明しなければならない。さらに、所属集団の状況によって謝罪の意識に違いがでるか調べるため、シナリオは集団のまとまりが強い状況と、弱い状況の 2 種類を用意した。回答者にはいずれかの条件を読ませ、それぞれの状況をすりこんだ上で、釈明を行わせている。

質問に用いた主要な尺度についても言及する。まず、謝罪はどの程度行われうるのか知るために、大淵の 4 つの釈明区分である謝罪・弁解・正当化・否認(Ohbuchi, Suzuki & Takaku, 2003)を参考にし、どのような釈明をするのかを測定した。それぞれの項目は謝罪「すみませんでした」、弁解「私は事前に静かにするように注意しました」、正当化「私はその場に居なかったので A 君(加害者)をとめることはできなかったのです」、否認「何もしない」で、それぞれ行う可能性を 4 件法(1. 「とらない」～4. 「とる」)で尋ねた。次に、謝罪を行うとしたら、どのような気持ちで謝り得るかを尋ねた。本研究では、謝罪時の気持ちを「心から申し訳ない」「謝りたくない」「苦に思わない」の 3 つ設定し、これらの気持ち

が、それぞれどの程度感じられるかを4件法（1.「全く感じない」～4.「とても感じる」）で尋ねた。

3. 結果

集団の代表として自分が関与していないことに釈明を求められた場合でも、大半の人は謝罪を行うと答えていた。これは、まとまりの強い集団であっても、まとまりの弱い集団であっても変わらなかった。両集団はそれぞれ順に98.3%、97.9%と、どちらも100%に近い数値で謝罪をすると答えた。

だが、言葉上謝罪をしていてもその気持ちは複雑であった。謝罪時の3つの気持ちをそれぞれどの程度感じるか尋ねたところ、以下の2つの特徴が見出された。第一は、所属集団のまとまり別による、謝罪時の気持ちの差である。表1は、集団のまとまりによる謝罪時の気持ちの差を調べた結果である¹。表1より、まとまりの弱い集団に属している人は、まとまりの強い集団に属している人よりも、より謝りたくないという気持ちを感じにくく、さらに謝罪を苦に思わないという傾向があることが見て取れる。

表1. 集団のまとまりと謝罪時の気持ちの関連

	集団のまとまり		t	df	p	有意差
	強群	弱群				
心から申し訳ない	3.40	3.25	0.94	95	0.349	n.s
謝りたくない	2.60	2.27	1.83	97	0.071	+
苦に思わない	2.91	3.23	-1.67	104	0.094	+

また、第二の特徴は、複数の気持ちを同時に抱えている人がいることである。つまり、心から申し訳ないと感じると答えた人は、同時に、謝りたくないという気持ちや、謝罪を苦に思わないとも感じると答えていた。さらに、このような複雑な3つの気持ちを抱えやすいのは、自分に責任はないと判断している人だということもわかった。これは表2を見ると明らかである。表2は、シナリオの一連の問題の中で、どこに責任範囲を置いているかということと、その人が謝罪時にどのような気持ちであるかということについて、調べたものである。この2つの変数には関連がみられた。表の点線部が示すように、加害者や現場に責任があるととらえる人ほど、「心から申し訳ない」「謝りたくない」「苦に思わない」を同時に感じる割合が高いことがわかる。

だが集団としては好ましくない、「まとまりのない状況」にいるときほど、たやすく謝罪ができるのはなぜだろうか。またなぜ、謝罪者は矛盾した複数の気持ちを抱えるのだろうか

¹ 2つのグループの平均値の差が有意であるかt検定によって判断した。表1の場合、例えば「謝りたくない」という気持ちは、集団のまとまりが強群において2.60、まとまりが弱群において2.27である。4件法であることを考慮すると、どちらも3以下であるため、感じられにくい傾向にあると言える。p値が0.071 (p<0.1)であり、この差は有意傾向であった。社会調査において、有意差はp<0.05であることが基準となっており、本研究での結果は有意傾向であるという限界はある。

か。考察では、これらの問題について論じていく。

表 2. 責任範囲の認識と謝罪時の気持ちの関連

		謝罪時の気持ち						計	N
		心から	苦無し	心から+ 謝りたくない	心から+ 苦無し	謝りたくない +苦無し	心から+ 謝りたくない +苦無し		
責任範囲	① 加害者	0.0	14.3	0.0	7.1	28.6	50.0	100.0	14
	② 加害者+現場	0.0	3.8	0.0	46.2	3.8	46.2	100.0	26
	③ 関わった人+現場+ リーダー	10.0	7.5	7.5	32.5	5.0	37.5	100.0	40
	④ リーダーのみ	0.0	0.0	0.0	80.0	0.0	20.0	100.0	5
	⑤ 集団全体	5.3	10.5	10.5	36.8	0.0	36.8	99.9	19
	計	5.2%	8.2%	5.2%	38.1%	7.2%	36.1%	100.0%	104

(フィッシャーの正確検定²: $\chi^2 = 30.46$, $df = 20$, $p < 0.1$)

4. 考察

4-1. まとまりの弱い集団のときのほうが、人はたやすく謝罪できる

集団の状況としては好ましくない、まとまりの弱い集団のときほど、集団のためにたやすく謝ることができる。このような、一見すると奇妙な結果が示された1つの理由として、被害者の存在が考えられる。つまり、まとまりの弱い集団では、被害者の気持ちを考えにくいために、感情をこめずに、なすべきこととして謝罪ができるのではないだろうか。本研究では、別の調査項目より、集団のまとまりが強いときほど被害者の気持ちを理解しているという結果も示されている。この結果から、まとまりの強い集団と弱い集団では、集団外部に対する意識の違いがあると言える。

さらに、日置・唐沢 (2010) の研究によると、まとまりの強い集団と、弱い集団で同じトラブルが起きた場合、集団外の人々はまとまりの強い集団の方に、集団全体としての責任を知覚しやすいことが示されている。つまり、まとまりの強い集団に属している人々は、たとえ自分が関係のない問題であったとしても、外部の人々から、加害者として扱われやすいのである。このような状況では、気軽に謝罪などできないだろう。一方、まとまりの弱い集団に属している人々は、そもそも、被害者から集団の責任を押し付けられる可能性が低い。そのため、問題を自分のこととして真剣に考える必要もなく、苦もなく謝罪ができるのではないだろうか。

この結果と仮説は、まとまりの強い集団の人々が、自集団よりも外集団の目を気にし、行動していることを示した点が新しい。これまで、集団のまとまりの強さは、内集団ひいきを起す場合があることが示されてきた (Karasawa, 1988)。だが今回の結果においてはその逆であり、まとまりがある集団のほうが、より外集団 (被害者) へ配慮していた。しかもこの外集団への配慮は積極的というよりはむしろ、外集団からの圧力によって、そうせざるを得ない状況であるために行われている。このような結果は、集団と外部の関係性の

²標本数が少ない場合であっても、2つの変数間に関連があるのか、それとも独立なのかを判断できる。

新たな側面を示したとも言える。

4-2. 集団での謝罪における複雑な心境

トラブルの責任が現場にあるととらえる人ほど、自分が謝る際には異なる3つの気持ちを抱えやすい。だが、自分は悪くないと割り切っている人が、「心から申し訳ない」という気持ちも含めた複雑な心境に陥っているのはなぜだろうか。

その1つの可能性として立場の重複があげられる。自分に責任はないと考える人は、自分を個人として考えたときにこのような判断に至る。だが、集団の一部として謝罪をしなければならぬとき、この時点で集団の一部であると認めていることに気付く。謝罪とは、行為への関与・行為の不当性・結果の責任のすべてを認めたときに行われる行為（大淵, 2010）であり、これを行うということは、自分が加害者の一部であり、責任があるということを示すからである。このとき彼らは、個人としての自分と、集団としての自分の両方の立場に立つことで、複雑な気持ちになるのではないだろうか。

4-3. 本研究の社会的意義

本研究は、これまで盲点となっていた「集団の中で謝罪をする人の心理」に焦点をあて、謝罪時の心理に集団の状況が影響するという新たな知見をもたらしたことに意義がある。だが新たな分野での研究であったため、本研究ではカバーしきれない部分や発展すべき点、さらにはもう一度確認すべき点などいくつか課題が残っている。例えば、本研究は大学生集団での結果を示したものであり、一般的な集団に応用できるとは限らない。謝罪の機会が多くなる社会人を対象にした場合にどのような結果になるかは興味深い。また、立場や状況を変えて調査する価値もある。例えば、自分が悪いのに謝らせてしまった人、あるいは集団にいるけれど何もしなかった人が、何をどのように考えているのかについても知ること、集団での問題解決のあり方まで発展して考えることができるだろう。

参考文献

- 大淵健一編（2010）『謝罪の研究 - 釈明の心理と働き』、東北大学出版会
- Ohbuchi, K., Suzuki, M., & Takaku, S. (2003) Strategicness/authenticity of accounts and their instrumental/non-instrumental variables: A cross-cultural examination. *Tohoku Psychologica Folia*, Volume 62, pp.57-74.
- Karasawa, M. (1998) Effects of cohesiveness and inferiority upon ingroup favoritism. *Japanese Psychological Research*, Volume 30, pp.49-59.
- 齋藤勇・萩野七重（2004）「自己防衛としての謝罪言葉の実証的アプローチ」、『立正大学心理学研究所紀要 Vol.2』、立正大学心理学研究所、pp.17-33.
- 早川貴子・萩野美佐子（2008）「加害者による謝罪の言葉と情動表出行動が被害者の許しに与える影響」、上智大学総合人間科学部心理学科、『上智大学心理学年報 32』、pp.67-75.

日置幸一・唐沢謙 (2010)「集団の実体性が集会的意図と責任の判断におよぼす影響」、『心理学研究 81(1)』、
日本心理学会、pp.9-16.

附録

資料 1. シナリオ 1 : まとまりが強い集団での謝罪

あなたは大学で ABC サークルに所属しています。今年あなたは 3 年生で副リーダーを務めることになりました。

ABC サークルは歴史ある公式のサークルで、毎週土曜日の活動日にはほぼ全員が参加しています。また部員たちは仲が良く、サークル活動外でも頻りに飲み会を開いたり、遊びに行くなどお互い気の知れた仲間です。そして今週の週末はサークルで年に 1 度のキャンプがあります。

——キャンプ当日——

夜になり、あなたはコテージの仲間たちと楽しく話をしていました。すると違うコテージの 3 年生部員があわててやってきて、あなたに助けを求めてきました。話をきくとそのコテージの後輩 A 君がお酒を飲みすぎて外で大声を出して走りまわっているとのこと。A 君は普段はおとなしいですが最近 20 歳になったばかりでお酒の歯止めを知らず、また A 君の周りのメンバーも A 君にお酒を勧めていたようでした。さらにこの騒動がコテージの管理人にも伝わり、管理人はかんかんに怒って「責任者を呼べ」と言っています。今朝のミーティングで部員には「夜は静かに」と注意をしておいたのに！それにしても、A 君の班にも別の 3 年生がついているのに。よりによってこんな時にリーダーは疲れ果てて寝てしまっており、現時点での責任者はあなたです。今朝コテージの管理人に「他のお客さんもいるから、うるさくしないように」と警告をうけたばかりに、何とも気まずいです。また来年もこのキャンプ場を借りるだろうに…

あなたはその後管理人のもとへ行き、_____な対処をしました。

資料 2. シナリオ 2 : まとまりが弱い集団での謝罪

あなたは大学で ABC サークルに所属しています。今年あなたは 3 年生で副リーダーを務めることになりました。

ABC サークルは昨年できたばかりの非公式のサークルで、活動日は土曜日にもかかわらず、いつも部員の半分以下のメンバーしか集まりません。また部員間でのいさかいなどもあり、サークル内はいくつかの派閥にわかれてしまっています。サークル活動外での部員間のつきあいはほとんどなく、お互いの情報や人柄などもそれぞれあまり認知していません。しかしそんな中今週の週末にサークルで年に 1 度のキャンプがひらかれることになりました。

※以下シナリオ 1 と同文